

瀬戸内では約 2100 年前に塩づくりが始まりました。この頃の塩づくりは土器に海水を入れて煮詰める土器製塩と呼ばれるものでした。その後の古墳時代に入ると時期が下るにつれて、土器製塩のあり方や、製塩に用いる土器の形などに変化が現れます。

1. 塩作りの歴史
2. 塩作りの土器
3. 塩作りの方法
4. 製塩土器の変化
5. 古墳時代における瀬戸内の塩づくり
6. まとめ

1. 塩作りの歴史

弥生時代中頃：瀬戸内の土器製塩の始まり

児島、小豆島、豊島で製塩土器が出土

飛鳥時代中頃：瀬戸内の土器製塩の終わり

中世～近代：塩田による塩作り

2. 塩作りの土器

●製塩土器

- ・土器製塩に用いられた専用の土器
- ・時代により形状が変化
- ・海浜部、島嶼部での出土・・・製塩遺跡
- ・内陸部での出土・・・海浜部、島しょ部で生産された塩を土器に入れたまま入手

●どのように使われたのか

- ・器の中に海水を入れて火にかけ煮沸→水分を蒸発させることで塩分を結晶化
- ・使用した土器は器壁にしみ込んだ塩分が結晶化し膨張することなどで破裂
→発掘調査で見つかる製塩土器は小さな破片であることが多い

3. 塩作りの方法

●^{さいかん}採鹹

- ・海水の塩分濃度を人工的に高める
- ・塩分のついた海藻を焼いて灰にする
- ・灰を海水と混ぜて布でこして鹹水を得る

●^{せんごう}煎熬

- ・採鹹により得られた鹹水を製塩土器に移して煮沸する
- ・煮沸の際には製塩炉と呼ばれる専用の炉を使用

●^{やきしお}焼塩

- ・煎熬により出来上がった塩をさらに加熱
→熱により余分な水分やにがりを取り除く



煎熬の様子

4. 製塩土器の変化

瀬戸内の製塩土器は形状から大きく3種類に分けられる

●脚台タイプ（古墳時代前期）

- ・弥生時代より続く伝統的な形状
- ・土器の底に脚台と呼ばれる支えをもつ
- ・器の表面にはタタキ痕と呼ばれる、土器を板で叩き締めた跡が残る



脚台タイプの製塩土器（坂出市 櫃石島大浦浜遺跡出土）

●小椀タイプ（古墳時代中期）

- ・脚台タイプから脚台を取り除いたような形状
- ・表面にはタタキ痕を残し、器壁が非常に薄い
- ・脚台タイプと比べると容量が小さい
→一つの土器から作れる塩の量が少ない

●大形ボウルタイプ（古墳時代後期）

- ・半球形ないしは深めのボウルのような形状
- ・容量が大きく、器壁が厚い



小椀タイプの製塩土器（坂出市 櫃石島 大浦浜遺跡出土）



大形ボウルボウルタイプの製塩土器
（坂出市 櫃石島 大浦浜遺跡出土）

5. 古墳時代における瀬戸内の塩作り

●古墳時代前期

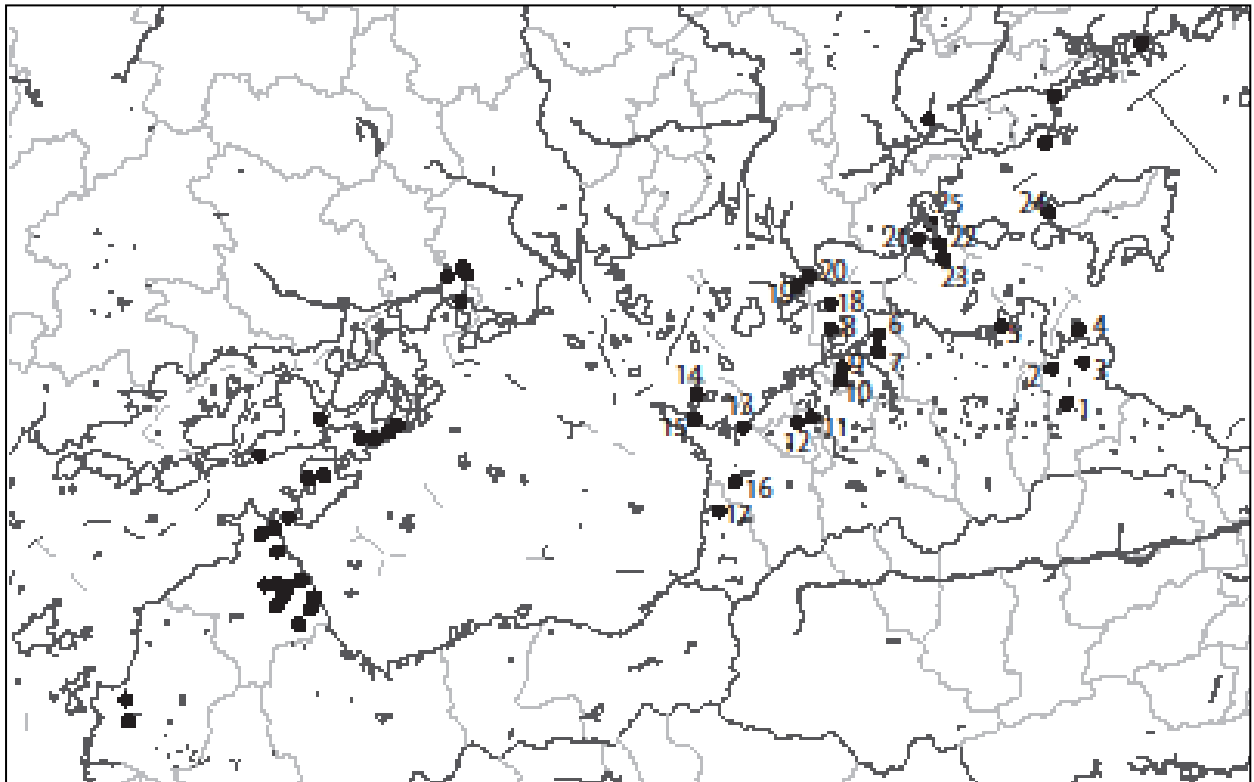
- ・多くの遺跡で製塩土器が見つまっている
- ・一つの遺跡から出土する製塩土器の数も多い
→安定的に塩の生産が行われていた

●古墳時代中期

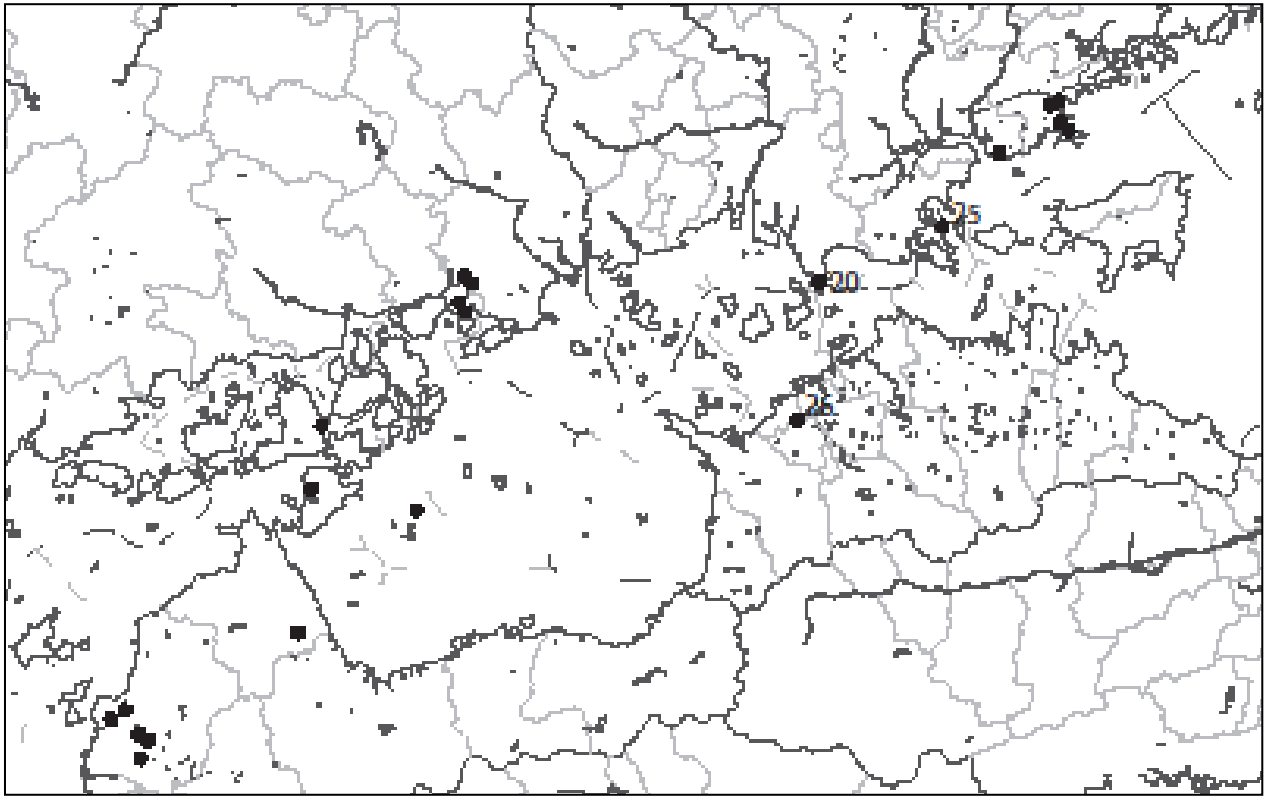
- ・製塩土器が出土する遺跡の数が激減
- ・一つの遺跡から出土する製塩土器の数も減少
→限られた場所での小規模な生産

●古墳時代後期

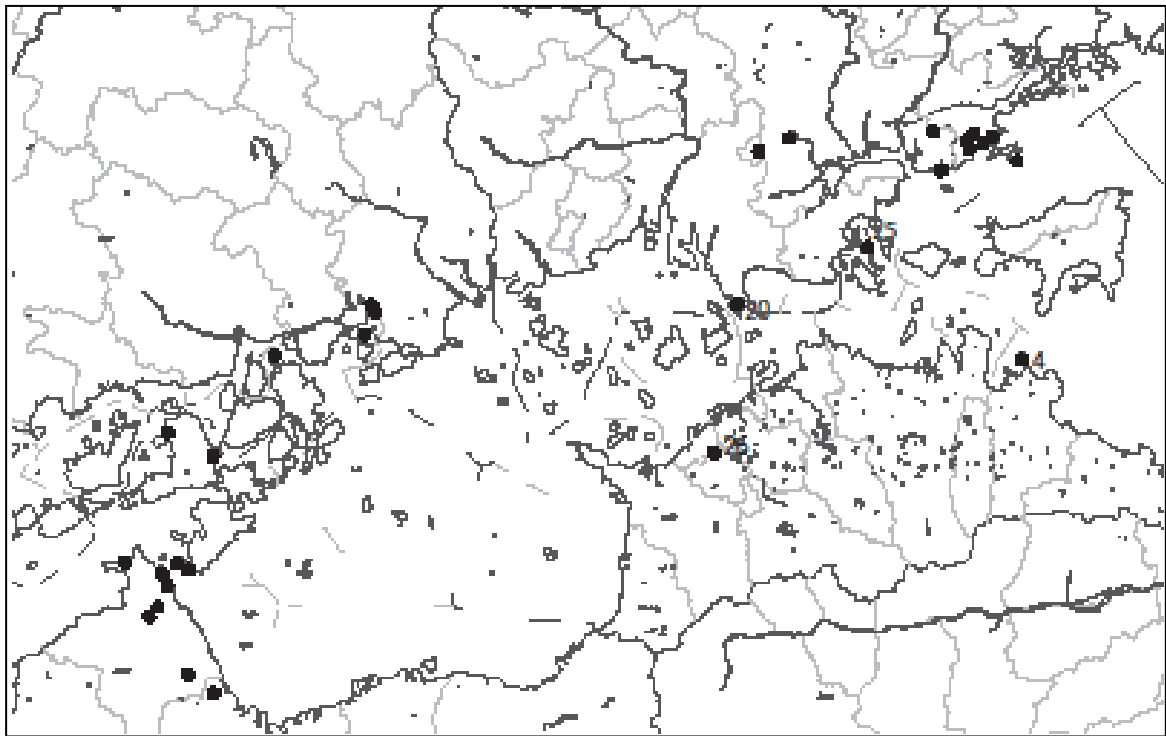
- ・製塩土器を出土する遺跡の数が若干増加
- ・見つまっている製塩土器自体の数も多い
- ・中には相当量の製塩土器が出土した遺跡も存在
→大形ボウルタイプの容量が大きいことを考慮すればかなりの量の塩が生産された



古墳時代前期の製塩土器出土遺跡の分布



古墳時代中期の製塩土器出土遺跡分布



古墳時代後期の製塩土器出土遺跡分布

分布図中の遺跡一覧（香川県）

1. 森広（さぬき市寒川町）
2. 八丁地（さぬき市志度）
3. 鴨部南谷（さぬき市鴨部）
4. 大串長蛇が谷（さぬき市鴨庄）
5. 浦生（高松市屋島西町）
6. 高屋（坂出市高屋町）
7. 本鴨（坂出市加茂町）
8. ナカランダ浜（坂出市沙弥島）
9. 下川津（坂出市川津町）
10. 川津一ノ又（坂出市川津町）
11. 三条番ノ原（丸亀市三条町）
12. 道下（丸亀市金倉町）
13. 西久保谷（三豊市三野町）
14. 栗島西浜（三豊市詫間町）
15. 船越八幡（三豊市詫間町）
16. 延命（三豊市豊中町）
17. 一ノ谷（観音寺市本大町）
18. 小与島（坂出市与島町）
19. 向島D（丸亀市 向島）
20. 大浦浜（坂出市櫃石）
21. 葛島東浜（香川郡直島町）
22. 直島積浦（香川郡直島町）
23. 直島倉浦（香川郡直島町）
24. 伊喜末（小豆郡土庄町）
25. 喜兵衛島（香川郡直島町）
26. 旧練兵場遺跡（善通寺市仙遊町）

●塩作りの盛衰とその背景

- ・瀬戸内の塩作りが畿内の動向と連動
- ・畿内には大阪湾沿岸地域で作られた塩が古墳時代を通して持ち込まれていた
- ・大阪湾沿岸地域では古墳時代中期に最も塩作りが活発となり、前期と後期は塩づくりが下火となる
→瀬戸内の動向と反比例

6. まとめ

- ・古墳時代を通して瀬戸内の塩作りは規模や用いる土器の形などが大きく変化する
→他地域との関わりのなかで塩づくりが行われていた
- ・塩がどういう目的で作られ、どのように消費されたのかを考えることで当時の塩作りをより詳しく理解できる

